

| 専攻・コース名 | 職名  | 氏名     | 総括コメント  |
|---------|-----|--------|---|
| 日本画     | 教授  | 北田 克己  | 主な発表としては、名古屋市内で個展を開催し、20数点の作品発表を行った。科研基盤B「絵画表現における風土と技術-膠を中心とする伝統的材料の持続性に関する調査研究-」（研究代表）最終年では、教育普及のためのリーフレット英語版を刊行し、アメリカワシントンDCフリーア・サッカーギャラリーにおいて現地美術館関係者、コンサバターを中心としたワークショップを開催した。研究目的のひとつである、これまでの中国、EUと合わせて国際的な研究ネットワーク形成に進展を見た。 |
| 日本画     | 教授  | 岡田 眞治  | 本年度は、博士の主査として無事に学生に博士号を取らせることができ良かったと思います。個展・グループ展・院展と精力的に作品を発表し、研究を充実させることができた。委託模写に関しても、高野山明王院（赤不動）、京博（黄不動）の熟覧を成功させることができた。   |
| 日本画     | 准教授 | 井手 康人  | それぞれの活動に真摯に取り組めた。   |
| 日本画     | 准教授 | 吉村 佳洋  | 日本画の制作研究においては展覧会の発表を通し、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。今回の反省点を今後の制作に活かせるよう研究を重ねたいと考える。また昨年度から科研に採択されたことにより、より深く日本画の画材や技法の研究が深まると考えられる。  |
| 日本画     | 准教授 | 岩永 てるみ | 研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。  |
| 日本画     | 准教授 | 阪野 智啓  | 日本画創作では思いがけない受賞なども重なり幸運だったが、今後ますます努力を重ねたい。古典絵画研究ではネットワークの広がりがより深まり、次年度以降の研究計画や進捗にさらなる期待感が感じられる。研究の広がり一方で、教育活動とのバランスが難しく大きな課題であり、カリキュラム運営に課題を残した。  |
| 油画      | 教授  | 寺内 曜子  | 研究活動のテーマ「人間は部分しか見えない」の新たな展開を新作「パンゲア」で具体化できたことが一番の成果、美術関係者からの評価も高い。東京での個展2件も高評価で東京都現代美術館が3作品を収蔵した。社会貢献も研究活動の評価に伴い、愛知県美術館の収蔵品が2回展示されたり、公開のトークやシンポジウム参加で聴衆に新たな気づきを与えることができた。今までの研究成果が実り充実した内容の一年間だった。                                  |
| 油画      | 教授  | 設楽 知昭  | 芸術教育・学生支援センター長として皆さんと協力して責務を遂行した。   |
| 油画      | 教授  | 阿野 義久  | 研究活動を通して積極的に地域や社会に貢献することが出来た。研究活動においては東京での発表の場を確保できたことが大きな成果である。このことにより今後の研究目標がより具体的な展望をもたらしたと自負するところである。教育活動に関しても一定の成果を挙げているが、今後、学生の受け入れ態勢を強化し、大学院博士課程において人材を育てる必要性を感じた。   |
| 油画      | 教授  | 倉地 久   | 研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自信が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、資料館長・芸術創造副センター長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に初めて深くかわり、微力ではあるが助力できたと考えている。   |
| 油画      | 教授  | 額田 宣彦  | ・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育てた。・大学運営～当初計画より業務が増加し研究活動の一部に支障があった。次年度は研究とのバランスに配慮したい。・社会貢献～展覧会企画開催。展覧会記録集の作成。個展カタログの作成。ギャラリートークなどを行った。特に2回の個展は準備に十分な時間を費やし検討を重ねたので非常に充実したものとなった。      |

| 専攻・コース名 | 職名  | 氏名     | 総括コメント  |
|---------|-----|--------|---|
| 油画      | 准教授 | 井出 創太郎 | 本学に着任してから始動し、継続展開してきた「落石計画」は、今年度で10年の節目を迎えた。落石の児童、生徒を対象としたw s で制作した作品群の中から二点の作品を選出し、根室市によって新設される「落石ふるさと会館」の大型ステンドグラスの原画とする運びとなった。「落石計画」は大切な実りの時となり、網走市立美術館との連携を含む、今後への新たな展開を生む会期となった。   |
| 油画      | 准教授 | 高橋 信行  | 研究や委員会等、基本的な部分では仕事が出来たと思うが、内容的には今ひとつと感じる。<br>来年度は特に研究活動で充実を図りたい。  |
| 油画      | 教授  | 白河 宗利  | 研究活動においては、専門である絵画の技法材料研究の新たな知見や成果が上がった。その一方で技法材料研究や外部から依頼された講演、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。   |
| 油画      | 教授  | 大崎 宣之  | 研究発表として、国内外にて個展、グループ展を合わせて10件（国内6/海外4）の展覧会に参加し、教育活動として若手芸術家支援プログラム(全5回開催)の企画運営を行い実行した。社会活動として展覧会企画1件、講演会等 4 件や各種委員の活動など充実した年度となった。  |
| 油画      | 講師  | 岩間 賢   | 本年はこれまでに取り組んできた研究活動に加え、「常滑 鈴溪藝塾プロジェクト」@愛知、「TURN」@東京（東京オリンピック・パラリンピック文化プログラム）、「F Project-半農半芸」@茨城という新たな研究活動を開始した。また、有機天然顔料の精製技術に関する研究では、科学研究費助成（課題番号17K18463）に採択された。教育活動では着任後の2年間に渡る教育内容を検証し、学生に沿った質の高い実技授業カリキュラムを編成した。大学運営では、芸術資料館運営委員として卒業・修了制作展の展覧会運営や本学初のアートフェア出展の企画運営に関わった。社会貢献では、文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、文化庁事業「文化芸術プロデューサー研修」、東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプログラムに参加している。 |
| 油画      | 講師  | 猪狩 雅則  | 施設整備と広報委員会では大学の運営方針などを踏まえて適宜発言し、運営参加できてきたと感じている。学生との対峙は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。  |
| 油画      | 講師  | 安藤 正子  | 教員二年目ですが、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、それぞれの分野で概ね目標は達成できたと思います。来年以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。  |
| 彫刻      | 教授  | 大塚 道男  | 国画会が主催する国展を中心に制作発表する。作品制作と発表の機会がともなわず、今後の展開について万全をはかりたい。社会貢献において自ら学ぶことが多く、また、各方面の方々との交流など有益にかかわった。特に俳句展で参加校の多くの学生・教員と交流が持てた。学生への指導については課題も多く、個人指導・対話等が結果として少ないように思われ、もう一歩踏み込む姿勢で対応していきたい。   |
| 彫刻      | 教授  | 土屋 公雄  | 29年度の研究活動においては、千葉県松戸市21世紀森と広場公園で開催された自然と交換する芸術祭「松戸アートピクニック／車掌からのアートとの出会い」展では、企画から行政と共に立ち上げ芸術祭全体の総合監修を行いました。教育活動や大学運営は例年のよう、後期博士課程並びに学部/院において独自の特別講義を実施、理論を中心に据えた授業を展開し、委員会では、学生委員会委員並びに芸術情報センター運営委員会（図書館運営委員会）を務めた。社会貢献としては、松戸アートプロジェクトなど継続のプロジェクトにより地域活性化企画を展開しました。以上のことから、自己評価として目標はおおむね達成することが出来た。   |

| 専攻・コース名 | 職名  | 氏名    | 総括コメント  |
|---------|-----|-------|---|
| 彫刻      | 教授  | 神田 每実 | 当初の計画について、学会参加を除いて全てを実施・完了した。種蔵プロジェクトにおける自治体との協力体制の前進や、新領域研究への参加、MEGI HOUSEにおける草の根的活動と参加対象者の拡張、他府県の教育機関における授業の実施や、共同研究の特許申請受理など、各取り組みの分野において新たな展開・進展が見られたことは評価に値すると思われる。但し、スケジュールの過密化が、各取り組みの質的向上の障害になる可能性も無視できないため、これを損なわないための検討が必要。 |
| 彫刻      | 准教授 | 竹内 孝和 | 研究活動では当初予定していたドイツでの個展と韓国のグループ展の他に二つのグループ展に参加した。どの展覧会に対しても新作を準備し、良好な結果が得られた。教育活動では3年ゼミで多くの学生を担当したが概ね良好な成果が得られたと感じている。また大学運営では入試委員会・入試広報委員会の二つの重要な委員を務めた。社会貢献は今後の課題としたい。  |
| 彫刻      | 准教授 | 森北 伸  | 概ね達成出来ました。  |
| 彫刻      | 講師  | 村尾 里奈 | 平成29年度国際交流事業「ニューヨーク在住の彫刻家・家具作家のクリストファー・カートツ氏との交流展、ワークショップ、および講演会」の実施に力を入れた。日東学術振興財団助成の「カラスステンレスによる着せ替え型彫刻作品の制作研究」を完了させるとともに、学長特別研究費(産学官連携)による「カラスステンレスによる外壁デザインの制作研究」に取り組んだ。専門分野での充実した研究活動を行うことができた。                                  |
| 芸術学     | 教授  | 中 敬夫  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「研究活動」に関しては、新著を刊行し、論文も書いたので、実り多き充実した一年となった。</li> <li>・「教育活動」と「大学運営」に関しては、例年通り、ごく順調に進行した。</li> <li>・「社会貢献」に関しては、特に言うべきことはない。</li> </ul>  |
| 芸術学     | 教授  | 小西 信之 | 今年度も昨年同様、大きな翻訳を2つかかえ、大部分の時間をそれに割いているが、出版されればともに現代美術界にとって有意義な業績となる（順調にいけば次年度内に両方（ロザンド・クラウス『視覚的無意識』、『Art Since 1900』）とも出版予定）。現在は最大限にこれに注力している。その他教育活動、大学運営は特に大過なくできたと考えている。   |
| 芸術学     | 准教授 | 高梨 光正 | 研究活動と、教育活動と、大学運営と社会貢献、それぞれ重要な活動ではあるものの、活動内容そのもののバランスが非常にとろづらく、止むを得ず研究活動や社会貢献活動を犠牲にしなければならない場面がこの数年多々あった。その反省を大いに踏まえ、今後はしばらく研究活動とその成果発表に重点を置いた活動に従事したい。  |
| 芸術学     | 講師  | 本田 光子 | 今年度は博物館学課程運営委員会委員長を拝命し、実務担当者として全学対象の博物館実習および芸術学専攻にて隔年開講の古美術研究旅行を両方実施した。重ねて拠点形成事業の研究分担者として中国およびウズベキスタンに計3回の出張があり多忙を極めた。来年度はじっくりと研究に取り組み成果を積み上げたい。  |
| デザイン    | 教授  | 白木 彰  | 多くの関係者や学生に支えられて、私なりに努力はしました。学部長の公務で学生の指導時間に制限がありました。満足に指導はできませんでしたが、学生たちはそれぞれ研究を進め良い結果を出してくれました。学生たちに感謝いたします。   |
| デザイン    | 教授  | 中島 聡  | <p>科研費（科学研究費補助金）申請を積極的に行い、東日本大震災や熊本地震などで顕在化した非難時の、特に自家用車で避難生活をしていただけた方たちのエコノミークラス症候群の状況を精査し、その対策を科研費テーマとして申請した。</p> <p>大学運営では学部、及び研究科の教務委員長として内在化する問題点を精査し、大学認証評価で指摘された点について対応に努めた。</p>   |

| 専攻・コース名 | 職名  | 氏名    | 総括コメント  |
|---------|-----|-------|---|
| デザイン    | 教授  | 関口 敦仁 | 今年度は研究活動に多く注力し、展覧会等の企画や開催を多く行った。また、学生の制作発表環境の改善など、大学の制作研究環境の充実を図った。対外的な活動も含めて、メディアアートの振興を図るコミュニケーションや活動につとめ、一定の成果をあげたのではと考えている。   |
| デザイン    | 教授  | 水津 功  | 研究活動ではそれぞれが展開を見せた。景観研究では市民による資源探査から視点場デザインへ、高齢者施設研究では余白の研究からデザインの意思決定における認知科学的研究へ、インタラクティブな都市照明はパノラマビジョンを用いた映像とパフォーマンスの相互作用へ、薪ストーブ研究はオフグリッドライフデザインへ、竹素材研究はまちづくりへ、移行帯デザインは中国の公共空間デザインへと展開した。<br>教育活動については、従来の教育プログラムに加えて、自己探求によって高めた個々の力をいかに社会の中で価値化するかに重点を置いた。大学院では研究の外部審査に重点を置いて指導し、デザイン学会において優秀発表賞、中川運河カナルアートの一般公募において学生で唯一入賞を果たしスカルシップを獲得するなど、学生の頑張りによって優秀な成績を収めることができた。<br>大学運営および社会貢献においては、少子化による受験生獲得競争が激化する中、本学が生き残る方法の一つとして今ある資源価値の最大化を計ることは必須と考え、<br>（１）豊かな自然と格調高い吉村建築群のキャンパス、（２）芸術教育を受けた学生との協働を望む企業や自治体や他大学との連携強化、（３）卒業生の自立支援に注目し、この大学にしかない魅力を強化することを念頭に置き活動した。 |
| デザイン    | 教授  | 柴崎 幸次 | 拠点形成事業B（アジア・アフリカ学術基盤形成型）やインディアナ大学との国際交流展など、一定の成果をあげることができた。   |
| デザイン    | 准教授 | 今尾 泰三 | 毎年度、可能な限りの努力を続けていると思うが、成果や評価につながったものもあれば、そうでなかったものもある。<br>更なる工夫、創意を各項目において実行し、本学教員として、また大学全体として、より大きな成果や評価につながるよう鋭意努力したいと思う。  |
| デザイン    | 准教授 | 石井 晴雄 | 受託研究 3 件、国際会議口頭発表 1 件、国内口頭発表 2 件、国際会議論文 1 件、国内論文（作品集） 1 件採択予定、その他地域でのワークショップ 10 回、その他イベント、講演、デザイン制作、番組制作など充実した研究活動を行うことができた。  |
| デザイン    | 准教授 | 森 真弓  | 今年度は、昨年度より継続している社会貢献活動を中心に、高校との連携活動や新たな研究についての模索などについて、積極的な活動が行えた。  |
| デザイン    | 准教授 | 夏目 知道 | 研究・教育・社会活動、ともに充実した活動を行うことができました。  |
| デザイン    | 准教授 | 佐藤 直樹 | 29年度は「研究」「教育」「大学運営」「社会貢献」を積極的かつバランスよく遂行することができた。それぞれに、次年度の活動への布石となる業績を残すことができたことが最大の成果であった。   |
| デザイン    | 准教授 | 本田 敬  | 日本デザイン学会 第64回春季研究発表大会での口演「クリエイティブデザインの実践と考察」が、グッドプレゼンテーション賞を受賞。日本身体障害者補助犬学会での口演「介助犬の水やり器の開発～インクルーシブデザインの手法を用いて～」が第9回大会の学会賞を受賞と、2つの研究成果を認めていただく機会に恵まれた。今後これらの継続に加え今年度あまり目立った取組みができなかった「国際交流事業」を来年度以降強化していきたい。  |

| 専攻・コース名 | 職名  | 氏名     | 総括コメント   |
|---------|-----|--------|--|
| 陶磁      | 教授  | 太田 公典  | 呉須（コバルト顔料）の学術振興会助成金、佐藤基金、学長特別による学術研究は「愛知県陶磁美術館青花展」図録に研究成果を寄稿、東洋陶磁学会において発表した。その研究から得た調査、考察による新たな制作の発想による作品制作をおこない、発表は「ほの国百貨店」個展、日本伝統工芸展入選、東海伝統工芸展入選、その他に地域で多く発表した。社会貢献では瀬戸陶芸協会、岡崎美術協会においても副会長として地域の芸術発展に寄与した。瀬戸街づくり委員では卒業生など若い陶芸家の育成について助言をした。  |
| 陶磁      | 教授  | 友岡 秀秋  | 産学連携事業とコンペ（CLDA）開催事業に追われている感がある。しかし私の専門であるプロダクトデザインは、社会との関わりがなかで成り立つものなので、やり甲斐を感じている。また学生達にとっても好影響であると確信している。今後も更にセラミック関連産業の活性化と若手の幅広い人材育成に寄与できる様、努力していきたいと考えています。   |
| 陶磁      | 教授  | 梅本 孝征  | 年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、多くの実績と成果を得ることが出来た。その成果をもって、主査資格を得た博士後期における活動をはじめ、30年度の活動を積極的におこなう。   |
| 陶磁      | 准教授 | 長井 千春  | 今年度は、アジアの芸術大学・デザイン研究の拠点となる大学との交流を、作品発表だけでなく研究発表、大学・学生間交流、ワークショップなどを通じて、幅広く実施できた。愛知県陶磁美術館で開催されたアジア現代陶芸展は、中国・台湾・韓国・日本の4カ国が共同で10年以上継続的に開催している陶磁作品展であるが、2017年度は本国がホスト国となり、その実施と各国芸術大学の訪問を陶磁専攻で受け入れ、大学間交流のきっかけ作りに貢献した。また、論文発表を中心とするデザイン学研究会・アジアデザイン文化学会（中国・台湾・韓国・日本・インドネシアが共同開催）も11回目を迎えた。同学会も今年度ホスト国として沖縄県立芸術大学で実施され、その運営に尽力できた。また、台湾台北にある大同大学の招聘により、工業デザイン学科にて食器と食文化に関する講演とワークショップを行い、同校との今後の継続的な交流を模索中である。 |
| 陶磁      | 准教授 | 田上 知之介 | 研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、概ね目標は達成できました。一方で、課題の残されている個人研究、博士前期課程の教育方法、国際交流においては、より一層注力し、今年度の成果を次年度につなげていきます。  |
| 陶磁      | 准教授 | 佐藤 文子  | 平成29年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。特に研究活動においては、シンクロトン光（硬X線）分析によって呉須の分析を継続的に実施した。陶磁器における色彩と原料素材についての研究を行うことができた。来年度においても陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探索することによって創作研究へと展開していきたい。  |
| 教養      | 教授  | 清道 正嗣  | 研究面の進捗は予定よりも少なかったが、ある程度の進捗はあった。教育・大学運営についても問題なく通常レベルで実施できた。  |
| 教養      | 教授  | 石垣 亨   | 研究活動については、他大学との共同研究に加えて本学の修了生との共同研究を行った。これにより、本学の修了生は学会口頭発表を2題と論文を1題の業績の獲得に加えて、新たな論文投稿の推薦も受けることができたことから、芸術分野に留まらない修了生の活躍の場を開拓できた。授業も新たな展開を行うことができた。また、学部の教授昇格要件の策定には、多くの意見を述べた。社会貢献は、中学校からの講演および学会理事長として活躍した。  |